

町 淳二・児島邦明 (著)

米国式 Problem-Based Conference

問題解決、自己学習能力を高める

医学教育・卒後研修ガイド

黒川 清

(日本学術会議会長)

いよいよ卒後臨床研修が義務化され、マッチングで卒業大学から外へと、多くの新卒業生が新しい医師として巣立つ。大学でどのような教育を受けてきたのか、どのような医師になるべく育ってきたのか、それぞれの大学の評価が広い臨床の場で評価できるようになる画期的なことである。もし、「混ざる」原則がこの義務化で採用されなかったなら、あいも変わらず出身大学病院の医局への囲い込みが当たり前のように行われていたであろう。まったくばかげている。臨床教育、クリニカルクラークシップもお題目で、何も変わらなかったのではないと思われる。

さて、医学教育の問題がいわれて久しい。何が問題で、その障害は何か。その1つが臨床での現場教育の貧困さであろう。それは教員の経験不足が主なものであって、これから医師になる学生のせいではない。この本に呈示されているのは、日常的に米国の教育現場で行われている、教員も、研修医も、学生も「タテ」の人間関係ではない、水平な同士、仲間としての教育の実践である。「なぜ?」「何の根拠?」「鑑別診断は?」「その理由は?」と次々と対話が進む。知的刺激が双方向のやり取りから

生まれる。患者中心の問題解決へといかに思考し、決断し、実践するのかのプロセスが示されている。「Problem-Based」は理屈ではなく、実践なのである。教えるのではなく、お互いに患者さんから学び、向上しようという前向きなプロセスなのである。実践からの知識は生きている。身につくのである。

著者の町先生は、いまや臨床研修の「超ブランド」になった沖縄中部病院で研修後、渡米。外科医としての研修を受けつつ転々と武者修行し、大きな難関を克服しながら米国外科専門医となり、そして現在はハワイ大学外科教授。児島先生は町先生の大学の同級生である。

この本に書かれていることは、ほとんどが米国で日常的に行われている「カンファ」である。章立ては、導入部から実際の外科症例へと続き、後半で評価方法の事例を示している。どこにも最後に「日本の立場からコメント」という欄が付いている。このような形式のカンファは、実際に自分で体験しないと、読んでいるだけではなかなか「感覚的に」理解できないかもしれないが、指導医の役割は「躍動感あふれるように進行する」「興

味をひきつけ維持する」ことであり、対話によって学生の積極的な参加を促している。このような体験を少しでもした人なら、この本の内容のスタイルをすぐに理解するであろう。たとえていえば、ゴルフは本ばかり読んでも理解できない。進歩しない。実際にクラブでボールを打ってみる、コースに出てみる、そしてまた本を読んでみる、練習する。この繰り返しが大切なのである。勉強も研修も同じことである。特に臨床教育ではこれが大事なのである。

だから著者は、「指導医の先生方は、是非、Problem-Based Conferenceを」というのであり、学生や研修医は「指導医にこのようなカンファを求めべし」と書いているのである。しかし、このような躍動感「書いて」みてもなかなか伝わらないところが、わかっている人にはもどかしい。やってみせることが最も重要なのである。何とか「書いて」これを表せないか。著者の気持ちが痛いほど伝わってくる。

この数年で、卒後臨床研修の場で、そして医学部のクラークシップで、どれだけこのようなカンファが普及していくか。医学教育改革が研修制度の「混ざる」大改革とともに急激に進化することを期待したい。実践あるのみである。この本はよいお手本である。学生にも、臨床研修病院でも、是非、試してほしいものである。

●B5/頁 256/2003年/定価 4,200円
(本体 4,000円+税 5%)

[ISBN4-260-12714-4]医学書院 刊